

図書館の誕生—アレクサンドリア図書館をめぐる

日本大学図書館 経学部分館長

根村直美・教授

(倫理学)

“読書離れ”が言われて久しい。文化庁が2014年3月全国の16歳以上の3,473人を対象に実施した「国語に関する世論調査」⁽¹⁾では、電子書籍を含む読書量の変化などについて尋ねている。それによると、マンガや雑誌を除く1カ月の読書量は、「1、2冊」と回答したのが34.5%、「3、4冊」は10.9%、「5、6冊」は3.4%、「7冊以上」が3.6%だったのに対し、「読まない」という回答が47.5%と最も多かった。確かに、これは、「読書離れ」といわざるをえない状況を示すデータと言えるであろう。

このような状況に直面し、図書館は、色々なイベントを行うようになっている。例えば、東京都中央図書館について見てみよう。そのホームページによれば、5月には、財務省関東財務局が子育て支援の一環として実施している出張講座「ママ・パパのための将来に備えたマネー講座～家庭と日本のお財布のはなし～」が開催されている。また、7月には、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、日本の文化について理解を深めるとともに、国内外に発信するための取組の一環として講演会「立川流真打が語る落語の魅力」が開催されている。図書館は、今、人々が集い、情報を交換する場を提供するための新たな方法を模索しはじめている。

講演会などの形で情報交換の場を提供していくことには、いわば、話し言葉を用いたコミュニケーションの場を提供することである。そうした場を提供することに一定の意義があることを否定はしない。しかしながら、図書館が「話し言葉」を通じた情報交換の場という機能を持ちはじめたからこそ、図書館とはどのようなものとして始まったのかを振り返ることにも意義があるだろう。

そこであらためて目を向けてみたいのは、古代最大の図書館と言われるアレクサンドリア図書館である。『知はいかにして「再発明」されたか』⁽²⁾を書いたイアン・F・マクニリーとライザ・ウルヴァートンによれば、この図書館建設に着手したデメトリウスはアリストテレスが創始したアテネのリュケイオンの学徒であり、アレクサンドリア図書館はアリストテレスがその本において行おうとしたことを非常に大規模に展開した施設であった。というのも、アリストテレスは、互いに相争う立場を統合するために、学問は文字によっ

てなされるべきだという立場を取ったからである。そして、デメトリウスも、口頭による議論ではなく、テキストの分析や統合の上に学問を打ち立てるべきだと考えていた。実際、どこの図書館でも、対立した考えが述べられた文書が一箇所に並べられている。際限なく続くばかりでなく、より一層対立が激しくなる話し言葉での議論に対し、あらゆる立場の居場所を確保する知的空間を作ることで、その状況を整理しようとしたのが図書館というわけである。

ちなみに、マクニーリーとウルヴァートンによれば、様々な王朝が出来ては消えたにもかかわらず、中国文明が統一性を維持できたのもまた、書き言葉のシステム、文字の伝統のおかげだったという。様々な方言を話す中国の学者たちは、面と向かってわかりあうことはできなかったが、書き言葉の世界で意思疎通し、そのことが彼らを強く結びつけたのである。

こうした話を紹介するのは、書き言葉による対話や学問のみが必要で、話し言葉による対話や学問が必要ないと言いたいからではない。そうではなく、書き言葉での対話や学問が果たしてきた役割、また、それらを収集・保存していた図書館は果たしてきた役割を忘れるべきではないのではないかということが言いたいのである。読書離れが言われる中で話し言葉を用いたコミュニケーションの場を提供するようになってもお、図書館が書き言葉による対話や学問の場であり続けることの意義は小さくないことは歴史が教えてくれるのである。

ただ、「読書離れ」の状況ゆえに、書き言葉にこだわり続けることは図書館を衰退させてしまうという危惧がもたれるかもしれない。しかし、2017年1月～2月に全国15,861人の児童・生徒から回答を得た「子供の読書活動の推進等に関する調査研究」によると、小学生・中学生では、平日に読書をまったくしない児童・生徒は1～2割。約5～6割は1日に30分未満の読書をしているという。また、小学生では1か月に5冊以上読む児童が半数を超え、1冊も読まない率は1割未満であった。つまり、小中学生では読書冊数は増えている。この読書冊数の上昇傾向の背景にあるのは「朝の読書活動」という。書き言葉にこだわる図書館の未来は意外に明るいのではないだろうか。

(1) 文化庁「平成25年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」、
http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/h25_chosa_kekka.pdf、アクセス日：2019年9月2日。

(2) イアン・F・マクニーリー／ライザ・ウルヴァートン（富永星訳、長谷川一解説）『知

はいかにして「再発明」されたか—アレクサンドリア図書館からインターネットまで』日経 BP 社、2010 年。

(3) 平成 28 年度文部科学省委託調査「子供の読書活動の推進等に関する調査研究」報告書概要版、平成 29 年 3 月、<https://www.kodomo.go.jp/info/child/2017/2017-063.html>、アクセス日：2019 年 9 月 2 日。